

「乙女の港」・その地位の検証

— Lesbianism の視点ほか、または 八木洋子頌 —

I

川端康成の個人全集として現在最も網羅的な新潮社版三十七巻本で、小説篇は二十三巻、そのうち第十九・二十の二巻が「少女少女小説」に充てられている。このこと自体、永らく文壇のトップレベル（余りいい言葉ではないが）に在った作家としてはかなり特異な現象だろうが、今、その二巻に収録されている昭和敗戦以前の作品を内容及び初出誌によって少年向け・少女向けに分類すると、前者が四篇、後者が十八篇、いずれとも決めがたい（或いは作者自身とくに区別しなかったかとも思われる）もの一篇、となる。更に時期的な推移を見ると、前者は全集解題で掲載誌不明とする一篇を除いて昭和四年以前の初出だから、川端の少年少女小説とは殆ど少女小説の謂いとしてよからう。

「乙女の港」は、そうした川端の長篇少女小説の第一作として、実業之日本社発行の雑誌『少女の友』に昭和十二年六月号から翌十三年三月号まで連載され、連載終了の翌四月、同社から単行本として刊行された。この作品に続く同じ作者同じ掲載誌の二つの長篇少女小説

は、次作「花日記」（昭13・4〜14・3）の初刊が完結の九年後の二十三年十二月（ヒマワリ社刊）、その次の「美しい旅」正・続篇（昭14・7〜16・4、16・9〜17・10各断続掲載の後、未完中絶）は十六年三月号掲載分の文末に「少し書き足して、近いうち本に」したい旨の予告があるが、実際は翌四月号で八書き足し√た分までの初刊が翌十七年七月（実業之日本社）であった。それらに比べると「乙女の港」の初刊は異様に早く、連載中の人気のほどが察せられよう。当時女学校三年生だったという室生犀星令嬢朝子さんの回想（「辰っちゃん」と疎開」、昭38・7『国文学』）に、

私の女学校では、多勢の人が愛読し、中原淳一氏の挿絵を、わざわざ切りぬいて集めたり、読書というところ、この小説に話題が集中するほどファンが多かった。

とした上で、朝子さんも「これらの人たちに洩れなく、単行本となった一冊が欲しかったもの」「自分のお小遣いで日本の作家の本を買い求め、それを机の上に置くということが」同業の父親に対して妙に気恥かしく、たまたま堀辰雄の結婚式（十三年四月十七日）に列席した帰り、新郎の堀に「その単行本について何かをしゃべった」ところ、堀が「朝ちゃんがほしいなら、僕が川端さんに葉書を書いてあげよ

大 森 郁之助

う。」／＼と言ひ、気軽にホテル備えつけの紙に、短い手紙を書き、私はそれを大切に家にまで持ち帰り、翌日投函した。四、五日後署名入りの本が、川端さんから届き、何人もの友人の間を本は渡り、ある意味で私は友だちから、羨ましがられたのであった。というエピソードを誌しているが、この空気は恐らく犀星令嬢周辺だけの特殊現象ではなかったのであろう。

その後、敗戦を挟んで、川端生前における右の三長篇の単行本化（含、初刊）及び他の作者と合乗りの少年少女文学全集の類への収録度は、次のようになってゐる（三十七巻本全集第三十五巻収「著書目録」に拠る）。

	単行	収録
乙女の港	6	3
花日記	1	0
美しい旅	2	4

多い少ないといったところで一桁の数の中での差だから余り大きな意味は持たせ難いが、下段での「美しい旅」との伯仲を含めて、ともかく「乙女……」の総合的最優位は云えよう。

こうした八世評は作者の自作観とも齟齬するものではなかったやうで、右戦前の三作のうち「歌劇学校」（昭24・6〜25・7）「ひまわり」『万葉姉妹』（26・1〜12同）の二長篇を加えた時点で猶、自分の「少女のための小説」としては『乙女の港』よりもよい作品はなかなか出来ないやうです」と云い（昭27・11ポプラ社刊『乙女の港』収「作者のことば」）、また、他の作品の単行に際しても

私は十年もつとまへから、「乙女の港」など、少女のための小説をいくつか書きました。そのころ読んでくれた少女たちが、今はもう大人になつても「乙女の港」などをなつかしくおぼえてゐてく

れます。（昭27・8ポプラ社刊『万葉姉妹』収「作者のことば」）と、自作少女小説の代表視してわざわざ言及している（昭29・9河出書房刊『乙女の港・美しい旅・万葉姉妹』まえがき「三つの物語について」にも、ほぼ同文がある）。

更に既往の川端研究史での扱いを見ても、八川端康成の（又は、と）少女小説と題した論考に於て、大橋清秀氏（『論究日本文学』四号収、昭30・11）は実例としては「乙女の港」のみを取り上げ、馬場重行氏（『川端文学研究』十九号収、昭56・1）は副題を『乙女の港』をめぐって」とする。両者共に、前引「歌劇学校」「万葉姉妹」の後さらに「花と小鈴」（昭27・2〜12）「ひまわり」「親友」（29・1〜30・3）『女学生の友』の二長篇が加わったのちのものだから、少なくとも研究史的には「乙女……」は川端の長篇少女小説のすべてというに止まらず、全少女小説の代表作として、まあ、許されている、としてよいのかとも思う。

そこで、こうした「乙女の港」の確固たる地位は何によるものなのだろうか、ということを考えてみたい。

但し、こういう場合に警戒を要するのは、或る作品の特色の一つ一つが直ちに長所でないのは通常のことながら、とりわけ年少未熟の読者をして、読ませる効果となると、成人の目に留まる特色とはかなり別事であろう。従つて、或いはこの点が与つて力あったか、と考えるのはかなり慎重でなければならず、具体的には、多くの見逃がしを生じようことは覚悟して大まかな押さえ方にとどめるよう（あるいは、大まかに押さえられる事柄に限定するよう）、自己抑制に努めねばなるまい。

また、長篇と短篇とでは年少の読者にとって印象・感銘の大きさが、したがって後々までの愛着の深さも決定的に異なるから（珠玉の小品を賞玩するのは成人の鑑賞態度だろう）、比較の範囲は前記の引き

続いて発表された（即ち大まかにいえばほぼ同時期の）三長篇——そしてこれが戦前の長篇のすべてでもある——に限る（戦後の四長篇は、作品自体の出来栄えとは別に、時代の風潮として少女小説一般及びその媒体としての少女雑誌の地位が低下し、戦前の「乙女の港」との争覇圏内にはないと考えられる）。

さてそこで三作を見比べて、単純な意味でまず目につくのは、作品の舞台設定に於ける「乙女……」の突出ぶりだろうか。全十章中、五・六章と七章の前半が軽井沢に移る以外は、横浜の、フランス系のカトリックの「基督教女学校」と、「異国風な豊かさ」を湛えた「静かな屋敷町」、「円い丘」が連なる牧場、そして時には無住の西洋館の荒れはてた庭、また由緒ある古い教会の質素なクリスマス祝会が、舞台となつてゐる。避暑先の軽井沢でも、落葉松の林の中の道や、木立に囲まれた別荘地、霧、浅間の噴火、土産物屋の店先の民芸品や郷土人形、「港よりも多い」外人の風俗、「体も靴も、並はづれて大きい」黒服の牧師のいる聖パウロ・カトリック教会、日本語と英語が入り混じる水泳大会、「各人の子供でいっぱい」の「軽井沢子供学校」の音楽会、と、観光小説風、あるいは世にいう少女趣味的風物が次々と繰り上げられる。

これに対して、次作「花日記」は主舞台は東京と思われ、買物に「日本橋から銀座まで歩いた」などとあるが、都心の風物・風俗といったものはとくに出て来ない。もっとも、予想読者の居住地比率から考えても東京は相当数の読者の現住地だろうし、住んではいなくても、平生の生活の中での交渉（本人又は家族、知人の行き来、及び情報という形での）は、日常生活の次元では一貿易港というだけの横浜よりは遙かに多かつたろう。それに反比例して、物珍しさ的魅力は異国情緒の港町としての横浜に比べて格段に乏しかった筈で、わざわざ描き甲斐は少なかつたろう。女主人公の女学校は「官立」で、「凡て

の規律が厳格、校風は質実、勤勉をモットオとしてゐるくらゐだから」「こせこせした空気があつて、才媛は沢山あるらしいけれど、ミッシェン・スクールのやうな、物語めいた明るさは、乏しい」と自認されている（ちなみに女主人公の姉はミッシェン出なのだが、その女学校時代の日記にも「乙女の港」でのような牧師や神父、修道女・宗教行事等は全く現れない）。

全十二章中、七章後半から九章前半までは避暑先の千葉県北条海岸が舞台、また十章以下には転地療養先の神奈川県辻堂海岸が点出されるが、後者はともかく前者も、海岸の風物は「乙女……」に比べるとそれ自体としてよりは人物の行動の背景的な取り上げられ方で、従つて、いわばどここの海岸でも変わりなさそう——多くの読者が体験していそうな（住んではいなくても）範囲にとどまる。軽井沢は避暑地であり、避暑という生活様式の有閑階級的限定性に対して、海水浴は京浜・阪神等の大都市圏に読者の集中している地域からは日帰りが容易に可能にむしろ普通な、遙かに一般的な行楽だったから、海岸という舞台は描き方どうの以前に、土地としてそれほどの魅力を持ち得なかつたとも考えられる。

三作目の「美しい旅」は、前半が東京から汽車で半日行程（？）の雪の深い山村（信州？）で、「北国」の野山や湖水が三・四章に点描されるが、固有名詞としての地名が出ていないので山地の自然一般という感じで、それならば海岸ほどではなくても（例えば戦前の臨海学校と林間学校の比率）さほどの珍しさは観光的魅力はない。後半は東京に舞台が移るが、これも「銀座」という地名が出るだけ、続篇の二・六章は満州になるが、これは異国には違ひなくとも少女読者の憧れを誘う土地ではなかつたろう。

こうしてみると、丁度新聞や大衆雑誌の小説が挿絵によって読者の目を引き得るように（その点は右三長篇の初出時挿絵はいずれも中原

淳一で「美しい旅」続篇は落谷虹児、差はつかないが、「乙女の港」はまず第一に舞台となる土地や場所の設定に於て、ともかく魅力を感じさせる作品であり得たかと思われる。そして、ともかく魅力を感じさせ読み進んで行かせるうちに、後追的のにも、いわゆる内容（ストオリイヤ人物）・表現の魅力も感じとられてゆく、というケエスも有り得よう。

そこで次に挙げられるのは、「乙女の港」の構成上のまとまりの良さ（破綻の少なさ、と控えめに云っておいてもいいが）ということである。

それと対照的に、最もまとまりが悪く不手際が目立つのは三作中で最も長大（三十七巻本全集本文で三百三十一頁、他の二篇は二百頁前後）な「美しい旅」（正・続）であって、その荒筋はというと、東京から夜行日帰りの山歩きに來た明子（女学校四年）達男（中学一年）の姉弟が、山間の小駅の駅長の家で世話になった際、駅長の娘で盲聾の子の母を助けて花子の教育の途を捜す、といったことになる。作者の自解には「ヘレン・ケラー全集が、座右の参考書で、眼が見えず、耳が聞えずとも、人生は美しいといふ主題」の「教育小説」（「旅中片信」、昭15・7『文学界』）とも云い、又「あなたがち聾盲の教育小説を企てたわけではなく、聾盲の子を通じて、この人生や世界の美しさに至らうといふ試み」（初刊本あとがき）とも云うが、結果としては「川端の少女小説の中で特異なものと言えらるが、では、小説として成功しているかという点、必ずしもそうはいえない」（羽鳥徹哉氏「川端康成解説」、昭52・11ほるぶ出版刊『日本児童文学大系』第二十三巻）。

その原因は、と考えると、作品の後半で花子の教育の主役たるべく設定された「月岡先生」のモデルの実在女性が「結婚のために教職を退いて、夫の任地の大陸へ渡つて行」き、川端は「この人なしにこの

作品は書けないと言へるほど」落胆して、続稿の勇氣も挫け、しばらく呆然としてゐた^{（註2）}。挙句、「この人がまだ聾学校にあるつもりにして、この作品を書き続ける」ことにした（初刊本あとがき）、という不運もあつたにしろ、そもそも「女学生相手の小説が、女学生相手に書こうとするにはちょっと無理なところへ踏みこんで」た（羽鳥氏）ともいえようし、より根本的には

三重苦の少女が、世界に意味を見つけたし、コミュニケーションを獲得するなどという過程の記述は、よほど確かな構成を必要とすると思われ、そういう構成的なものに、川端の資性は適していなかつたということも考えられる。（同）

川端自身、この制作の難渋を

書き進んでも、感興に乗れるといふことがなく、無理押しの努力である。骨が折れ、時間がかかる割に、面白さは乏しく、女学生達がよく読んでゐてくれると思ふ。（「旅中片信」）

と告白している（前引初刊本あとがきにも同趣の記述あり）が、具体的な不手際としては前引羽鳥氏の詳細な指摘があつて、すなわち、「だいたい、山間の小駅の駅長さん夫婦が、『お父さま』『お母さま』だったりするのはそぐわず、『そのお父さまが病氣にな』ると「他の知人親戚らしきものが現われなくて、他人の明子や達男が大きく出てくるところ」、また「小学教員の資格を持ち（引用者註、自ら『昔、学校の先生をしてゐたことがあるのよ』とも言っている）、これから聾学校の教員の資格も取ろうというほどのお母さまが、自分の子の花子に対してなすところなく」「すべて達男の手によって行われる」等の「不自然」、「盲学校聾学校参観のくだりになると、かなりリアルな参観の記録が長々と続」き「前の少女小説的なくだりとは、テンポも調子も違つて」きて、「続篇の満州旅行（月岡先生の）のくだりになるとなお」甚だしい、作者自身の体験記録の均衡を失した挿入——と

いった事どもである。付け加えれば最後の満州旅行に至ってはどのような事情の旅行か説明もなければ伏線もなく、いわば何のつもりか（月岡先生も、作者も）判らない、という感じである。

それでは、「美しい旅」の前、「乙女の港」のすぐ後の「花日記」は、どうか。

これは分量も全集中で「乙女……」の百七十五頁に対し二百十二頁と近く、女主人公は共に都会（横浜と東京、前述）のプチ・ブル家庭（「乙女……」の三千子は夏休み軽井沢の伯母の別荘へ行き、「花……」では主人公の姉の嫁ぎ先が千葉の貸別荘に避暑、姉が発病すると転地療養させる程度の）の女学生で、テエマは、これも共に、手っ取り早く云えば上級生と下級生等の同性愛であるから、かなり類似した作品とも感じられよう。

しかし仔細に見るなら、まず構成の上で、「花日記」には「乙女の港」とはつきり差のつく不備・不手際が散在しているのではないか。

(1)まず、冒頭章「姉嫁ぐ」で、母を失い父親だけの二人姉妹の、母代りでもあった姉英子の挙式の日、情げ返る妹なほみ（仮名遣は敢て改めずにおく。この少女が主人公）を慰めて英子が「あたしがあなくなると、もう暫くして、新しいお母さまが来て下さるわけを、あんなに話してあげた」ではないか、と諭す。その、「きつと」姉の「ことなんか忘れてしまふくらゐ」「好きになれ」るだろう「とてもいいお母さま」は、姉がいては何故この家に来られないのか、と反問されると、英子は「笑つたまま答へない」。勿論、俗人の我々には大きな継娘の存在は障害になろう位の察しはつく訣だが、これだけ注意を喚起するような形で提示され、ひよっとしたら継母継娘ものかと予想させよう（新しいお母様）というものが、その後は結尾（約一年後になる）まで遂に姿を現わさず、話題にさえも出てこない。多少とも身を入れて読み出した読

者は不審からやがて焦れだし、最後に背負い投げをくったことに気付いてあっけにとられる、ということにはなるまいか。

又、それに比べれば局部的ではあるが、なほみが姉に去られた淋しさから（妹）を求めて得た相手の綾子（一年生。なほみは二年生）が、級長に選挙されると（十章「級長選挙」）、脚の障害のために役目が果たせないことを恐れて辞退しようと考えている。相談を受けたなほみは「先生が」同意なされば「クラスの人だつて怒りやしないでせう」と言い、担任教師は「クラスに相談して」代わるのならよからうと答えるのだが、それだけ留意されているクラスへの相談が、なされたのかどうか、悩んだあげくの辞退が結局出来たのかどうか、話はそれきりになってしまふ。結果は判っているから、とも云えないので、綾子は一往副級長との入れ替えを希望しているのだが、クラスの意見次第では再投票という展開もあり得よう。しかも、雰囲気（登場人物間ではなく、読者の側の）的には、同章末尾でなほみから綾子が選ばれたこと（だけ？）を聞いた英子が「出しゃばりな人気者よりも、綾子さんのやうな人の選ばれたのは、ほんたうに美しい話」と、辞退云々とは方向としては逆の賞賛のみを述べて、終っている。もちろん英子が決定するわけではないが、結果は自明、という印象から読者を遠のかせる効果（多分、意図せざる）はないだろうか。さきに局部的とは云ったが、一つの章題にまでなっている話題にしては扱いが気紛れすぎよう。

(2)この作品には、同性愛関係が

(A)女学生時代の姉英子と、英子の上級生（英子が残して行った日記（なほみによって「花日記」と名づけられる）の中で）

(B)なほみと、綾子（前述）

の二組、描かれている。(A)を知ったなほみが、その示唆もあって

(B)を形作る、という繋がり、いいかえれば(B)を作品の中心と見てもなおかつ(A)の存在意義はあるともいえるが、反面、中心が仄けている気味はないか。

さらに(イ)なほみと姉英子、(ロ)なほみの隣家の友達清子と英子の関係も、(A)(B)とは明らかに差があるが通常の姉妹・先輩後輩(清子は英子の卒業したミッションスクールに在学中)の関係は越えているようにも思われる(特に(ロ))。もしそういえるならば一層、色とりどりの花園の景観は呈してもその中の一輪が鮮明に印象されることは難しくなるのではないか。かりに作者の意図が前者の効果にあった(不念ではなかった)としても、読者はどちらにより魅せられたろうか。

(3)前項に関連して、この作品は全体を貫き統一するストオリイや主題といったものが弱い。冒頭に姉に嫁がれる妹の淋しさがあり、結尾がその姉の死なので、首尾の枠組みから想像すれば(姉英子と妹なほみ)が主題でありそうだが、その間に挟まれた部分の中心はどうも(なほみと綾子)のようだ。なほみが綾子を求めた動機が姉に嫁がれた淋しさと姉の日記の示唆だという点で、枠組みとの繋がりはあるが、もう一步突込んで考えたと失ったのは(姉)からの(庇護)であり、姉の日記が示唆するのも上級生の(お姉さま)との(愛)なのに、それに導かれて求めたのは下級生の(妹)という扱れがある。

その、(扱れ)で得たものによるなほみの充足感(極めて高く、

日曜が来ても、なほみはどこへも遊びに行きたくない。／ただ家にゐるだけで、ちつとも不平がなくなつてしまつた。／「なんとといふ不思議なことだらう。(略)「ほんたうに、変だわ。どうしたのかしら。」／と、なほみは自分に言つてみ

る。(略)それで、いつも心持がおだやかであつた。／自身心のなかに、なにか新しいものが住むやうになつて、それで満ち足りたやうな日々……。 (五章)

ということになるのだが、そうであれば尚更、扱れは大きいと云わねばなるまい。

(4)前項、下級生の(妹)が現実になほみの前に現れる(三章末尾)以前に於て、早くも一章の終り近くで「上級生のエス(引用者註 sister (in law))の略)のある生徒」とか、「エスとか、オデイア(O dear の意)とかの交際」といった(概念)が地の文に出て来て、——やがては期待や願望に転じようけれども差し当たってはより客観的な(見)をいだいでいるであろう主人公像と、そうしたことによるストオリイの展開の予測とを、読者に与える。

次いで二章に入ると、なほみは姉の女学校時代の日記で「お教室のお机のなかに、見知らぬ手紙が入つてゐた」「どこかで、私の見知らぬお姉さまが、見ていらつしやる」「早くあたしのお姉さま、あたしの前に立つて下さい」といった、(お姉さま)体験の生成過程を——なかんずく、その一部分として、この時点のなほみに最も適切な示唆である(お姉さま)願望の(熟成)過程を、いわば(ブッキング)に、学ぶ。そうした学習や、「ほんたうのお姉さまでなく、嘘のお姉さま」云々といった級友との会話によって眼を開かされたなほみは、三章で「可愛い新入生の、まだ学校になじまない、生真面目な態度が、朝礼の時も、一番眼につ」き、「あたしが嘘の妹の姉さまになつて(略)遊ぶやうな日があるかしら」と、わが身の上の実現に期待をいだくに到る。その直後に綾子という現実の対象との交渉が生ずる(四章)のである。感情の自然な流露の結果だけではない、いわゆる(恋)を恋する人(的)要素をかなり多量に含んでの進行といえよう。(なお、この点は

なほみに八恋を恋しわしめた姉英子（の日記）自体も、手紙をくれた上級生と実際に対面する以前に、「あたしは幼い頃から、姉の心を持つて育つて来た。／あたしは、妹をいたはる心しか持たない。お姉さまに甘えることは知らなかつた」「もし誰かが、あたしが妹を愛するやうに、寛い温い心で、あたしを抱いてくれたなら、あたしはどんなに仕合せだらう」と想像する（二章）、観念的願望先行型である。）

こうした、主人公が十分の予見を持った上で体験するという筋立ては、その間にこういう事柄に全く無知の読者（この作品の読者層には少なかつたらうが）にも予備知識を与えろという効果はあるにしても、同時に、実現する際の主人公の感動の新鮮さを減じ、従つて読者の感銘も減殺される、という逆効果も否定できまい。

さて、以上の諸項に類する難点は、「乙女の港」には見られないか、又は遙かに微弱である。

まず(1)に対応する尻切れとんぼ事項に似ているのは、第三章で夏休みの計画を語り合っている時に軽井沢へ行くと言つた経子（女主人公三千子の級友）が、五、七章の三千子の軽井沢滞在中に全く姿を見せないことと、八章で、卒業学年の二期を迎えたクラス内の会話で「修学旅行が楽しみだわね」と話題に出ながら、その後は全く触れられないこと、位であろう。しかし経子は三千子と特に約束したわけではないし、また、学校行事をすべて描く仕組みになっているわけでもない。期待外れではあつても、なされねばならない決着の不遂行とは違ふだらう。そして「花日記」の継母の仄めかしなどは、事の重大さが——それぎりでは済まされなさが、違ふ。

出来事ではないが登場人物の出かたで、三千子の兄達はやや中途半端ではある。一章末で三千子が「あたしお兄さまばかり三人もあつ

て」と言い、次の二章でたしかに三人について述べてはいるのだが、三千子との交渉が一往描かれているのは殆ど末の兄だけで、中の兄とは会話が二行分、及び、末の兄「と野球の話をしてゐる」とあるのと、後日「三千子の作文を大層ほめて、つい先達て」天折少女の遺稿集を買つてくれたと説明される（三章）程度、長兄にいたつては「日頃」から母に心配をかけていて（この家は「花日記」と逆に父を欠く）「昨日から帰らぬ」と、不在の紹介（！）で終る。そしてともかくも三人を紹介した後は、末の兄すら直接には姿を現わさない。三千子が一人子でない、つまり普通の家庭（当時は）ということを示す以外の意図はすぐには思い浮かばないような人物設定だが、これも無くてはならない後段の欠落というのとは違ふだらう。

また、末兄は二章では中学三年で三千子と「時折、学校の帰りに、町の中で行き逢ふ」とあるから自宅通学なのだらうが、十章では「冬休みに、帰省して（同じ家に）ゐる」と説明され、少々身分不明の感じだが、作者としては粗忽ながら読者側の興醒めはどれ程でもあるまい。

(2)(3)との対比をいえば、「乙女の港」のストオリイは甚だ簡明である。女学校一年の三千子と五年の級長の八木洋子、通称八木マリアさまとの結びつきを主題とし、それに横あいから四年の副級長の克子が絡んで、途中一時克子の方が優位に立つかに見えるが三千子は再び洋子に戻り、最後には克子も「洋子さんにお詫びしたい」「私だつて、お姉さまと（洋子を）呼びたいくらゐよ。もし洋子さんが、呼ばせて下さるなら」と柔和になつて収束する。筋に変化をつけるものとしての波瀾はあつても、分裂や拡散、逸脱はない。

(4)に対しては、第一章「花選び」の冒頭で、「美しい花を選ぶやうな眼つき」で一年生を「待ち伏せしてゐる」上級生達の

「今度の一年生は、おチビさんが多いわね。」／「（略）あれくらゐが可愛いわ。」／「まあ、もう目星をつけてるの？」／

「こつちでいくらぎめたつて、一年生だつてお人形ぢやないんですもの。思ふやうになりやしなくてよ。」

といった、ハンター（「花日記」ではなほみに相当）側の実況の描写があるが、肝腎の三千子本人は、貰った手紙（洋子と克子から）を読み終つて

ほつと溜息が出た。上級生の方たちは、なんて名文家揃ひなんだらう。／＼ついでこの間まで、竹馬に乗つたり、とんぼ捕りばかりしてゐた自分は、こんなお洒落な手紙に答へる言葉も知らない。／＼どうしたらいいかしら……。

と、甚だ無邪気に途惑うばかりだった。前々から「基督教女学校は、官立の女学校よりも、生徒同志の友情がこまやかで、いろいろな愛称で呼び合つては、上級生と下級生の交際が烈しいといふことくらゐ」は「うすうす聞いてゐたけれども、それが実際どんな風に行はれるものか」見当もつかない。級友から「エスつていふのはね、（略）上級生と下級生が仲よしになると、さう云つて、騒がれるのよ」と教えられても、「仲よしつて、誰とだつて仲よくしていいんでせう」と反問して「あら、そんなんぢやなくてよ」と一蹴される無知さ加減である。その後も、「三千子はなんだか女学校の交際といふものが、随分妙に感じられる。例へば、毎日逢つてゐるのに、お互ひに知らん顔して、手紙でばかり話し合ふ。しかし考へてみると、これも楽しいことに思はれる」とあつて、「考へてみ」なると同調し難い違和感さえあつたのである（以上、一章。付け加えれば、相手の洋子の方もこれまでは「とても秀才で、下級生なんか相手になさらないので通つてた」とされている）。

つまり、読者としては上級生の視点から事情を示されているけれども、読者の目の前の主人公は殆ど先行観念も先行願望もなしにいきなり直面し、その直面した具体的な事態と相手の魅力に引かれて進んで

行く。二者択一式に分ければ「花日記」とは逆といえよう。

この差違の因としては、「花日記」のなほみに於ける二動機、姉の結婚と姉の日記中の記述とに対応するような事柄が、「乙女の港」の三千子にあつては、欠けるといふか、ほぼ逆であることが考えられる。なほみ姉妹は母を欠くからなほみにとっては英子が母代りだったし（六章に、なほみの父兄会にも英子がずっと出席していたとある）、また、英子の△お姉さま▽願望には

お母さまが亡くなつてから、あたしは少女のくせに、もう母親らしい気持で、妹を愛しはしめるやうになつてゐた。あたし自身、まだまだ、お母さまに甘えたい、すがりたい心でいっぱいな年なのに。という代替願望も複合していた（二章）。しかし三千子は父を欠くが母は健在で、兄ばかりだから、なほみや英子のような状態には縁がない。兄ばかりでは、彼ら自身△お姉さま▽体験（願望）に無縁だから、それを妹に学習させてくれようもない。

それぞれの登場人物の性格という要素も勿論あるが、それ以前に、まず主人公の身の上の設定に於て、「乙女の港」の同性愛はより自然な誕生と生長を予定されていたといえよう。

II

しかし、川端の少女小説に於ける「乙女の港」の地位は、如上のこと以外に、広く川端の少女小説全体について指摘される同性愛要素が、ここでは類を見ぬまでに△典型▽に近づいていることにも依つてはいないだろうか。

異色の推理小説家であり、その前に、令名高い大脳生理学者であつた木々高太郎（慶大医学部教授、医博林麟）は、女学生のレズビアンズムに端を發した殺人事件を扱つて「精神分析と正面から四つに組ん

だ長篇小説として稀有のもの」(中島河太郎氏、昭46・2朝日新聞社刊『木々高太郎全集』第五巻解説)と評される「わが女学生時代の罪」(昭24・3・26・12断続『寶石』)の中で、女学校の「女生徒同士の間同性愛」における「一種の倫理」の存在を主張している。すなわち、上級生と下級生との間でその関係が成立すると「まるで一夫一婦みたいなもので」、「第二の」上級生が付け文をしても「それに応ずることは出来ない。その付け文を、最初の」上級生に「みんな見せてしまわなければならぬ。つまり、良人のある妻が、他の男から恋文を貰ったときと同じだ」とするのである。

但し「完全な一夫一婦ではな」くて、例えば「四年生は三年生の愛人を持つ。その四年生は、四年生または五年生(略)に愛人を持つことは差し支えない」。同じく、「その三年生は、他の四年生、五年生(略)の愛人を持つことは、絶対に許されない」が「二年生のうちに、または一年生のうちに愛人を持つことはいい」。つまり、上下二方向に持っていくが同一方向に二人はいけない、とする。

もともと、先にこれまでの相手と「ちゃんと別れればいい」のだが、「どっちから言い出すにしても、正式に離婚を必要とする。かくしてやってはいけない」。違反した場合は「自然法」の「制裁」「つまり私刑」が課せられる。その他に「個人の復讐」も「たくさんある」がそちらは「恨みの問題」で「倫理や法律」ではなく、それとは別だ、というのである。

以上の「原則」は、医学部を卒業後「一年あまり」信州(?)の女学校の教師を勤めていたという登場人物の見解として述べられている。経歴からいえばたった一年では余り信用を置けない気もするが、この人物ほかの同性愛に関する知見√等を積み重ね押し詰めた頂点で(実際はそこからの飛躍があるようだ(中島氏解説))が、作者の分身とみられる大心地博士の診断が下されるのだから、人物は不信用でも

その人物が述べた右の見解自体は作者のそれに沿ったものと解すべきである。では、作者その人の信用度(勿論この問題に関しての)は、というと、同性愛自体は林教授の大関心事ではなかったろう(多分)し、女学校での教職歴もないけれども、専門の精神分析の対象として接したり、現場からの相談を受けたり、さらに氏直接でなくとも教え子達の見聞として情報を得、考えたことは有っておかしくない(因みにペデラスティを扱った作品には、通常の結婚をしたためにペデラスト仲間トに殺される「幽霊宙に充つ」(昭14・10)がある)。

しかしそもそも、そうした第三者には確かめ難い体験や造詣の多寡の問題を越えて、彼が絶大の自負を持っていたと見られる(つまり絶対に誤謬があつてはならない)最終診断に到る過程に不確かなデエタを組み込むというのは、手抜きとしてでも、うっかりでも、凡そ考え難いことだろう。また一方、この「原則」は直接に作品の主題たる△罪√の解明の糸口になっているわけではない。強いていえば、こうした原則さえ生ずる程の本質的な他者排除性——の一端として(?)の異性排除性——が罪の遠因ともいえるが、その一例乃至参考としての右の原則は抜いても、作品の本筋の推理は成立する。つまり、必要に迫られてのでっち上げや強弁又は軽信ということも考え難い。そして最終的には、甘い云い方に聞こえるかも知れないが、作者木々が世俗の目には非常識と見えるまでに自然科学と芸術の崇拝者であった(その好例は△人生二回結婚説√や△探偵小説芸術論√)ことは、木々の主観に即しても、また客観的にも、いわば文学に自然科学を引き入れる性質の右の見解に重味を加えるだろう。

もともと、素直に読み下せばそう力説する必要は多分ないのである。この「原則」は実際に女学校の現場でどの程度見られたかは別として(女学生の同性愛はすでに田村俊子の「あきらめ」(明44・1・3)にも明治三十年代のそれが見え、三代にわたる全国的な実情の総

括など不可能かつ無意味である)、理念として、は極めて自然な感情に即したものの——誰が(どういう作品の中で、どんな登場人物が)言おうと、言われてみれば肯ける(言われるまでは体験もせず考えてもみなかったとしても)といったものではないか。

さてそこで「乙女の港」だが、このストオリイで唯一のトラブルは前にもふれたように四年生の克子が五年の洋子と一年の三千子の間に割り込もうとした事である。洋子と克子の三千子への最初の誘いかけは、偶然ながら、入学式後間もない或る同じ日のことだった。三千子は両方の手紙を引き続いて披きながら、これまた偶々、下校時に急に雨になって洋子の家からの迎え車にさそい入れられ、そのまま洋子に傾いて行ってしまふ。勿論、洋子の第一印象が好ましくなければそう簡単に決まりはしなかったのだろうが、しかし洋子と克子の好ましさを比べた上のことではない(克子とはまだ対面していないのだから)。

そういう成り行き任せ的な決まり方ではあつても、しかし一旦決まつた(一章)後は、洋子克子「のほかに、四年のひと二人、五年の四人」からも手紙を貰つてゐることを、「お姉さまを幾人も持つ」「心臓が強い」人、と、級友から誘られる(三章)。私的な嫉みともとれるが、複数の級友が面と向かつて公然と非難しているのは、△一方向一人限り▽の△自然法▽違反だからかとも思える。三千子の反論が△幾人持とうと私の自由▽とはならず、手紙をよこすのは相手の勝手であり、それが幾人ものお姉さま「を持つてゐることに、どうしてなるの?」という形をとるのは、△幾人ものお姉さま▽の不法行為意識の共通を示唆しているようでもある。そうした中で「克子からは、三千子が洋子のエスになつた後も、幾度も手紙が届いた」が、「もう洋子に妹の心を寄せた三千子は、どうしても克子をただのお友達としてより、深くは思へ」(二章)、「一生、お姉さまをひとりしか持ちませぬやうに」と「胸のうちには、また誓ひを立て直し」もする(三章)。

克子ひとりが例外的に不拘束なのであるようだ。

だが、夏休みに入つて伯母に連れられて軽井沢に行った三千子は又も偶然克子に逢い、洋子を欠いた△場▽で急速に接近してしまふ(五、七章)。二学期が始まつてその二人の様子を目にすると、一年生達は「なにがどうあつたにしたつて」三千子が「いけない」と非難し、五年生は洋子の制止を振り切つて通りすがりの四年生に克子宛て「花園を荒す者は誰ぞ! 五年有志」と書いて托す(八章)。木々の云う「多数の民衆が一人の自然法破壊者を」罰する「姦通法則」の、最も控えめな一形態と見えなくもない。

そうしたトラブルを経て、結局、三人の和解という大団円に到るところとは前に述べた。だがその際に克子が「もし、洋子さんが、(克子にもお姉さまと)呼ばせて下さるなら」と言う(九章)のは、だから、洋子の憎しみへの懸念だけなのか、それとも△同一方向▽内での例外扱いになるためもあつてか、微妙である。

以上、「乙女の港」での幾つかの事態が、△自然法▽に沿つてゐると見ること、出来るものであることは承認されよう。少々歯切れが悪いが、対する「花日記」はさらに曖昧である。

例えば、なほみが足の悪い一年生綾子と初めて一緒に下校し、綾子の家の最寄り停留所を回つて帰宅した、その翌朝、まだ三四人しか登校してゐない教室の机の中に「天に眼あり。／＼まはり路をしてはいけません。／＼親しさを押しつけるのは考へもの」という手紙が入つてゐる(五章)。なほみからその話を聞いた隣家の友達清子は、それはなほみの「後からお友達(綾子の)になるのは、くやしい」からではないか、と推測し、なほみも「なにもあたしが、綾子さんも買ひ占めたわけぢやない」と嘆じていて(六章)、なほみの言葉が偽りでないなら△一方向一人限り▽の原則と△法▽は彼女の念頭にないわけだし、清子の推測が当たつていれば(又は、清子の認識に於ては)二人

目の友達には△なれない▽のでなく、△なる▽ことが(なれるのだが)△くやしい▽のだから、なほみの級友達も△原則▽に規制されてはいないことになる。

九章で、英子の日記の中に、庭の花を剪って学校へ持って行ったところ先に挿してあった花と合わないからと友達に拒まれて、英子はその友達が「あたしのお姉さまを、大変慕つていらしたのに、あたしのために失つてしまつたので」と理解する。ここは二様の解釈が可能で、その友達がただ一方的に慕っていたのなら△一夫一婦▽以前の段階であつて、△法▽が存在してもその保護対象にはならないから個人的に怨みをぶつけるしかないが、それは△法▽が存在しなくても同じことのおかげで、その場合は△法▽の存否は窺い得ない。しかしもしも一旦関係が成立していたのを英子が横取りした(上級生が英子に乗り換えた)のだとしたら、△法▽が存在すれば当然作動すべき事態なのに作動しなかつたわけだから、英子の卒業したミッションスクールにも△法▽は存在しなかつたことになる。

つまり「花日記」では、官立とミッションと二つの女学校で、共に、△自然法▽の存在は可能性としても示されず、逆に、存在しない可能性はあり、一校では、かりに存在はしても下級生(なほみは二年生)はそれを認識していなかつたと考えられる。

ここでもう一度比べ直すと、「乙女の港」では、可能性としては、△自然法▽の存在も想定される。△法▽として、△法▽と同一方向にまよまよしていると見られるケエスばかりであつた。そして、そもそも△自然法▽不文律法なのだから、「大勢的な考え方」との境界線はかなり微妙であつて、これは「考え方」にとどまらずまさしく△法▽だ、といった確認は困難な筈である。その点を考慮するなら、「乙女の港」では克子と三千子が最終的に△姦通▽にまで到らなかつたから成程これはもう△法▽だと納得させるような極刑の場面はないものの、その

ことにこだわり過ぎると事の本質を見失う危険がある(ついでながら、この△自然法▽の顕現は第三の少女の出現を前提とするから同性愛小説の最もシンプルな型(一対一の)に於ては起り得ず、必然的に短篇は不向きで、殊更云うまでもなかるうが同じ川端の短篇少女小説群にはこの程度にさえも窺えない)。

ところで前にもふれたが、こうした△法▽乃至「大勢的な考え方」が寛敵の差はあれ昭和戦前のすべての女学校に存し、すべての女学生の体験又は見聞又は認識する事実であつたらう、などと想像しているわけではない(げんに「花日記」が成立した)。むしろその逆で、読者自身の体験・見聞はそうではない(又は、それほどではない)場合でも、しかしこうした△法▽が当事者の心理として自然な方向の極致・典型化した形であつたら、それに沿つた作品形象は大袈裟に言えば一のゾルレンとして、強い魅力をもつのではないか。少女小説——その存在の△場▽としての少女雑誌、より広く少女文化(いずれも戦前期の)の本質は、と云うと話を拵げ過ぎるきらいがあるけれども、一口にいて虚構の少女像に自己同化せしめる共同幻想性に在つたとするのが現在の△少女学▽の通説のようである(それをどう評価するかはこの問題ではない)。

こうした少女同性愛の△典型▽化に関する「乙女の港」と「花日記」の差違は、その世界の対外閉鎖△自己完結性△についても云える。

「花日記」は度々ふれたようになほみの最初の憧憬対象だつた実姉英子が嫁いでゆくところから始まるので、当然ながら以後の対・実姉△関係▽には義兄という存在が割り込んで来るし、実姉その人も義兄と相互に組み込み合つた存在に変わつてゆく。こう云うと勿体らしいが極く卑俗な事柄であつて、例えば姉の初めての里帰りは義兄と連れ立つてだし(二章)、なほみが初めて姉の婚ぎ先を訪れた時も、野球見物に行くという義兄も待っていて出迎える(四章)。又、なほみ達

が姉夫婦の避暑先を訪れて滞在している時、姉は義妹に「明日、お兄さま（英子の夫。義妹には実兄）いらつしやるのよ。うれしい？」と問いかけて、逆に「待つてるのは、お土産だけ」「お兄さまだつて、あたしなんか……」とからかわれ「少し顔を赤らめ」る（八章）。その義兄が用事で一日遅れると判ると姉はもう「なにする気もないらしく」、昼のお菜も「お兄さまがいらつしやるのだつたら、材料は同じでも、こんな扱ひ方はしない」もので済まされてしまう（同）。

これらの事は、それが普通であつてそうでなかつたら困る、というものだろう。しかしそれほど△関係▽に割り込み姉と組み込み合つてゐる義兄は、一面では依然として少女達とは別の世界の人間でもある。姉が残して行つた女学校時代の日記を、なほみは、姉が去つた早春以来隣家の清子と読み合ひ、避暑先へも携えて来て義妹にも見せ、また△妹▽綾子にまで見せる約束をするのだが、そこまではただ「きまり悪さうに」見ていただけの姉が、「お兄さまに見せてあげよう」というなほみ達の発案だけは「少しこはい顔を」して「頑固に」阻む（八章）。これ又あたりまえであり、そうでなかつたら気持が悪くもあるが、しかしその、少女達なら未知の相手でも許せるがこの人だけは見せられぬという異質の存在たる義兄が、その点以外では少女達の世界（又は少女達と姉との間）に割り込んで来ている。すなわち「花日記」は、少女達の——従つて同性愛の——純粹培養の世界ではないのだ。それがどうしたと云うなら、余り適切な譬えではないが同性愛は片方に異性関係が生ずると屢々——又は心理的には——破綻する（実際の交渉は妥協的に持続され外見上両立する事例も多いにしろ）といわれることを、想起して欲しい。

こうした「花日記」の基本的性格⇨同性愛の世界としての不完結性は、なほみが綾子発見のいきさつを姉に聞いて貰おうと考えてだつて、お姉さまなら、もうお嫁入りして、女学校の「姉妹ごつ

こ」を卒業してなさるんですもの、きつといい相談相手になつて下さる。

と自問自答する（四章）所に、はしなくも露呈してしよう。つまり「花日記」では、少女達の世界は今げんに異世界の人間に割り込まれ部分的に異世界と重なり合つてはいるだけでなく、やがてはこちらの世界は消滅し異世界に吸収されてしまう筈のもの、と、当人たちに意識されているのだ。

「乙女の港」は、そうではない。

三千子には嫁ぐべき姉がいず兄達は長兄もまだ独身らしいし、洋子は一人子だから、どちらも身边には異性として機能している⇨異性として認識されるべき異性がいない。従つて、まず、構造的に少女達の世界は純一性を保ち得ている。次に時間的変容の見通しについては、結ばれた時すでに五年生だった洋子の方は、夏休み前には「一生かうしてゐられはしなくてよ」と三千子を諭す分別も流石にあつた（三章）のだが、卒業近い頃には三千子ばかりか洋子までも、同級生に対しては「ふつと、浅くて変りやすいといふ、女同志の友情に、淡い嘆きを覚え」る反面で

その女の友情を、あたしと三千子さんだけは、きつと永久に保つてみせる。そんな決心が、別れの日を前にして、泉のやうに胸に溢れる（略）

のである（十章）。物理的並びに心理的に、或いは、空間的並びに時間的に、純一性と永遠性を保ち得ている世界像と、保つていない世界像とでは、どちらがその世界に憧れる者にとって魅力的かは云うまでもあるまい。勿論、その世界に風馬牛の者にとつてはそのまま笑止さと白けの都合となるが、そういう者ははじめからこれらの小説を手にも取るまい。

「乙女の港」「花日記」それぞれの傾向がここまで浮き彫りにされ

て来れば、もう一点の差違も大きな意味をもって受け取られよう。それは洋子対三千子の組み合わせと英子——なほみ——綾子の関係とに於ける、八お姉さま√要素の充足度の差違である。

この二作品を比較して「愛される三千子の物語」対「愛するなほみの物語」とする端的な把握が羽鳥徹哉氏にある（前引「解説」）が、しかし女学校二年のなほみは愛する者としては当然未熟である。そこで、かつて愛する者であり（嫁ぐ日まで、なほみに対して）更に以前には愛される者でもあった（女学校時代に）姉英子を手本にしようとする（日記の繙読等）わけだが、その英子は既に他家の人となったことよって、なほみに対しての愛する者としてはいわば現役ではない。少なくとも専業・主務ではない。また一面、現在及び嫁ぐ直前の頃には愛に関して「ちつとも欲張りぢやない」聖女化している英子は、日記によって知られる女学生時代には愛される者として「少し欲張り」「やきもちやき」だったとはいえ、それはあくまで過去の事として記録の形で伝えられる（なほみに∥読者に）だけである。「母さまがいらつしやらなくて、ひとりでいろいろ心をお使ひになつて」「さういふ悪いところを、いつの間にか捨てて」しまった（以上、八章）過程共々、現在の生きた人間像としては、作中に存在しない。

つまり、この作品には八お姉さま√役は二人登場するがそれぞれに不全であって、二人合わせても（合わせて済まされるものかどうか判らないが）この作品読後に読者の胸に残る八お姉さま√像は欠損部分を持つていよう。

それに対して、「乙女の港」の洋子は初対面の折から「日頃夢見る（三千子が）童話の女神」になぞらえられ（一章）、それなりに聖女化されている反面、ときに「三千子がもう自分ひとりのものになったと、勝利の幸福に胸顫へ」もするし（二章）、家が財産整理をした時、「惜しいものはなにもない」と言いながら

「だけど、三千子さん、あなただけは……。惜しいの。離したくないの……。もしも、そのあなたまで、今までのあたしの持つてゐたものといつしよに、あたしから失はれてしまふやうだつたら、どうしませう！」／と、心のなかで、祈るやうに思つた。（七章）

また、三千子に克子との交渉について訴えられると、思わず、「誰とも（仲よくしたい）と言つたつて、その誰ともによりけりだわ」と、克子「と同じやうな、きつい口調」で答えてしまひもする（同）。三千子と克子の睦まじげな姿を見た後は「ともすると、白墨を握る手もとが顫へさう」で「自分の書く字が、自分で見えなくなる」こともあつた（八章）。

それが卒業間際には、
克子さんは強いから、三千子さんのことを、お願ひしておくわ。
三千子さんがやさしくしてあげないと、あの方、また意地つ張りになつてよ、分る？

と、自分がいなくなった後のことを三千子に論ずるまでに八聖化√が進んでいる（十章）。「花日記」と違って八理想のお姉さま√が現役で三千子の前にいる一方、未熟な「人間味」とその克服の過程もまた生身の洋子の上に表われて現前に示されるのである。

ところで少女小説に於ける同性愛モチーフ（成人間のレズビアニズムはまた別に考えねばならないとしても）の根源的な意味については、直接には『花物語』から、『女の友情』に至るまでの吉屋信子の作品世界の評としてだが、川村湊氏の明快な要約がある。すなわち、「これらの小説の）背後には、少女たちが『売られ』『捨てられ』『貰われ』てゆくという、現実が一面にあり、それに抗して、というより、それから我が身を庇って、「現実の社会においては空想的なものにしかすぎない」にしろ「異性を排除した『姉——妹』の関係を

純化することによって、自分たちのユートピア、女の花園をつくろうとし、「封建的な父母による子の支配ともいべき『家』とは別の形の、同性、同世代の人間による共同生活という理念を」示したものと、という把握（『妹の恋——大正・昭和の『少女』文学』、昭63・10『幻想文学』二十四号）である。

「売られ」云々は勿論限られた貧困階層の文字通りの人身売買（だけ）ではなくて（少女小説の読者層は社会階層的にもう少し上だろう）、むしろ良家の子女の根本的には人格と主体性をネグレクトされた△良縁▽の人生を主対象として用いられていると思われるが、少女小説の同性愛の遙かな地平をこのように把握するなら、その世界の構成員（登場人物）と共感者（読者）との根本的・一般的かつ典型的願望はまず男性優位社会（現実社会）から侵犯されないことである。それは自力で守ってもよく、誰かに守って貰ってもよからうが（但し男性に守って貰ったのでは自家撞着だが）、その逆の、例えば騎士道の対・貴婦人観のような△守ってやる▽願望、母性本能的願望ではあるまい。この世界の基本的人間関係である△姉——妹▽の図式に即していえば、△親代わりの△お姉さま▽としてか弱い△妹▽を守ってやる（現実の親及び社会的△親▽性から）ことが願いではなくて、そういう△お姉さま▽に守って貰うことの方であろう。

従って「花日記」が作品の中心をなほみの△妹▽が欲しい△お姉さま▽になりたいという願望に切り替えた——少なくとも、失った△姉▽を取り戻したい願望との二つに分裂せしめた——時、既に少女同性愛小説のスタンダードからは一歩外れたものとしなければならぬ（なお前引川村氏は右の把握の必然的帰結として、吉屋信子が「戦前、戦後において大量に生産した母子ものの少女向け大衆小説」に「圧倒的に多い」「捨てられ、貰われてゆく少女たちが、臉の母親に出会うというパターン」をもって、「母と子の『自然の関係』という

大きな物語に、『姉』を中心とした妹たちのユートピアという物語が回収されてしまった）「後退（引用者註、前出『花物語』は大正五〜十三年、『女の友情』は昭和八〜十年の作品）といべき」もの、と裁断している。

そして右の△願望の正統・非正統▽を△登場人物の主・従△正・副▽に置きかえると、この世界の主体あるいは典型的人格は守ってやる△姉▽でなくて守って貰う△妹▽の方と考えられるが、そのことを逆にいうと、この世界に於てまず一つの積極的営為とそのために必要な特定の能力・資質を要求される（右の主体或いは典型的人格からの要請として）のは、△姉▽の方である。△妹▽の方は、譬えば未熟でも半端でも（可愛くないのは困るが）よい、或いはむしろその方が守って貰うべき条件を満たしているともいえようが、守ってやる側の△姉▽はそうはゆかない。外に対しては健気に防ぎ支え、内に向かつては共同体の心情的充足を保つために、往年のヅカ・ガールではないが優しく美しく聡く健やかにといった、多分に類型的な枠を設けられるのもまた止むを得ないだろう。

「花日記」に於ける二人の△姉▽の、その善美の度合い色合いの品隋は今措くとして（それを始めたら切りがない）、しかしそもそも、その、条件的には最もゆるがせに出来ない人格が二分され（そういう意図かどうか判らないが）、それぞれは退役者と見習い中というのは、かりにそれぞれのパーソナリティにはそれなりの魅力があっても、この種の小説としては規格外の魅力ということになる。そして、そのことを裏返した形で「乙女の港」は少女同性愛小説の規範に収まり、優等生的にこれを満たす△お姉さま▽像を具備した作品といえるのではないか。

そして最後にもう一点。
前に引いた木々高太郎作品に、こちらは作者の分身的な大心地教授

本人の言として、「精神医学で」同性愛とよぶには「性欲的——性的関係の証拠」を要する、接吻ではまだ不十分だ、という、些か過激な定義づけが見える。

しかし文学作品の中のことになると、戦前は例えば昭和十三年九月内務省図書課指示の「当局が社会風教上面白からずと認める」主要事項の一つに「心中、同性愛、遊興等の魅力を強調せるもの」と並列されており（文芸家協会編『文芸年鑑』昭和十四年版）、芥川賞最終候補作家のレズビアニズム小説として知られる横田文子「落日の饗宴」（昭11・10『文芸春秋』）も所謂肩一つ抱いていない。三島由紀夫が「只今（昭45現在）大流行のレズビアニズムの小説の、おそらく戦後の先駆」と自註する（新潮文庫『真夏の死』解説）「春子」は昭和十二年、川端が「美しさと哀しみと」までゆくのは三十年代も後半のことだから、木々の立てた定義が戦前の少女小説で満たされていよう筈もないが、「乙女の港」十章で、三千子が、卒業して行く洋子と心の通い合いだけでは「頼りない」、「やっぱりお姉さまの体の傍にゐたいの」と言う所がある。これは例えば「花日記」で（「乙女の港」でもいいのだが）なほみが英子の「袖のなかへ」泣き込む（一章）とか、英子がなほみの「肩を撫で」て慰める（八章）とかの、接触部位が限定され具体的に意味の明らかな身体的表現や、綾子の第一印象の「甘い香ひのしさうな、幼い首の細さ」「薄さうな背なか」（四章）という、これまた部位と感覚とを限定されての官能的把握とは、微妙な差がないだろうか。

一つだけ例をあげると、少年少女の幼い恋をスケッチした「雨傘」（昭7・3）で、別れの記念写真を撮る時、少年が「少女と並んで坐ることが出来」ず「少女のうしろに立つて、二人の体がどこかで結ばれてゐると思ひたいために、椅子を握った指を軽く少女の羽織に触れさせた。少女の体に触れた初めだった」とある。「その指に伝はるほ

のかな体温」というから文字通りの羽織の端（だけ）ではなくて中に少女の肩か腕のある部分だったのだろうが、少年としては肩に触れたかったわけでも腕に触れたかったわけでもない。現実に触れたのは肩であり腕であっても、少年にとってはあくまで△体▽という、部位や機能を特定しない、従って日常の行為のレベルでは無意味的なスケエルの単位の、そのどこでもいい一部分だったろう。

「乙女の港」の三千子が執着するのも又そうした性質の△体▽であって、決して各部位各機能の総合体ということではないのではない

か。その先の、そ、う、し、た、「体」への執着が、ここではレズビアニズムの究極へと——遙かな距離を置き、まことに細々とであっても——向かっていないか、という読み取りが、深読み又は思い過ごしでないことの立証は、さしあたって断念している。しかし、たとえば、少女同性愛小説の極め付き『花物語』の一篇「日陰の花」には次のように云う。

あゝ！ ふたありは、（友情）の垣根をいつか越えてゐたので……
あつた。 ふたありは、もう禁制の木の果の甘さを知つてしまつた——
——今さら知らぬ昔に、どうして返り得られよう、（略）（秘密）
といふ美しい桃色のヴェールを、ふたありは大事に身につけてゐた。（略）ふたありはこのヴェールの陰にふたありのみ知る小さい匂ひやかな玉のやうな世界を、守り育くんてゆくのだつた——
（略）いいわ、私達、日の光には咲かずとも、月の青白い光にぬれて、咲けばねえ……」

ここで「禁制の木の果」が何のことか判らなければ結局一篇の嘆きの内容（事情）が判らず、何を云っているのか判らない作品ということになるだろうが、本書は「乙女の港」初刊の翌年十四年にも「乙女……」と同じ中原淳一の挿絵で新たに版を起こされている（実業之日本社）から、「乙女……」の時代の少女読者には判つたのだろう。その

読者が右「乙女……」での△体▽そのものを愛着対象として口にした個所（「乙女……」でもここだけだが）に接して、前述のような△思い過ごし▽を誘発されるということは想像も出来ないといふ切れるだろうか。

三千子と洋子が「日陰の花」の境域に入っている——ことを暗示する、と△思い過ごし▽してしまふ——と云いたいのではない。もしもそういう境域の存在を知ったならば躊躇いつつも傾いてゆきそうな、肉体欠如的では決してない感じ方を相手に対して持っている、そういった状態を感じさせないだろうかという意味である。勿論三千子自身はそういった状態を意識していなくて（相手の洋子も気付かなくて）差支えない。それは又別の問題である。

これは「日陰の花」でのように一篇全体の理解の鍵というのではないから、或る読者が何も感じなくても彼女の「乙女の港」享受には支障は無いと云つてよく（それくらい読み落とせばある方が普通だろう）、そういう読者が大多数であったとしても作者は悔やむことはあるまいし、また、それならさきの指摘は誤解だったのだろうという意見にも直ちには服せない。幾ばくかの読者が、秘薬か、それこそ日陰の花の禁制の实のように嗜む可能性が否定されない限り、右の読み取りを云い立てたい。

そしてこういう表現は「花日記」にはない。

さて、本稿はここ迄できるだけ作者論へと繋げないようにして来たのだが、そうばかり云っていられないこともあって、「乙女の港」及び「花日記」の作者はどの辺まで川端なのかという問題について、一言述べておく。この二作品に関しては、通常は代表作又は（少なくとも）合作と做されるような事情が公刊資料によって明らかになっている。

即ち、三十七巻本全集補巻二「書簡来簡抄」に収められた川端と中里恒子氏の書簡の、昭和十二年秋から十三年秋にかけての分に、

（昭12・9・14 川端→中里） 乙女の港はだんだん文章が粗くなり、書き直すのがむづかしく、書き直すといふことは、うまく参りませんゆゑ、なるべく初めの調子でやつていただくのと助かります。（略） 三千子は港に帰つて、洋子の心の戻るのに少し曲折あり、この三角関係少しモメタ方が、つなぎやすいかと思ひますがいかがですか。克子の天下あつてもよいかと思ひます（略）
（12・9・18 中里→川端） お手紙拝見いたしました。乙女の港お言は通り注意いたしました。どんな風に書いても、うまくなほして下さる。こんなわがままな考へ方が私にあるからかもしれない。（略）

（12・10・16 川端→中里） 軽井沢が二度続き、話の進みもヤマも前と余り変わりませんので、少し工夫して、大分書き変へました。／戦争は入れないこととし、戦前のつもりにしたいと思ひますがいかがですか。（略）

* * *
（13・9・17 中里→川端） けふ少女之友買ひ、花日記にかかります。これは自分でも書いてゐてたのしみです。勿論虚構の人物ですけれどその人物に私の思つてゐることをみんなさせてゐるせいかもしれません（略）

といったやりとりがあつて、中里氏がいわば下請けに書いた原稿を川端が校閲加筆して完成、という仕組と解される（とくに「乙女の港」の場合）が、その一つ前の段階として川端の腹案（筋の展開、場面の構成等の）が中里氏に示されているのか、どうか。また、中里氏の下請けに川端が加筆といつても、馬場重行氏が指摘した（前出「川端康成の少女小説」、『川端文学研究』十九号）ように、「乙女の港」の第

六章（初出昭12・11）末の軽井沢ジュニア・スクールの音楽会風景が一年後川端の「高原」四章（初出昭13・12）に取り込まれている、^{（註3）}といったこともあり、全体として、又は最終的には、川端が自作視し得るものになっていたということは考えられる。

しかし本稿で問題にしてきた「乙女の港」「花日記」それぞれの特色、とくに同性愛モチフが、そもそもは川端の作意に発するものか中里氏のかということ、俄かに推断し難い。強いて手掛かりを求めれば、

(一) 前引書簡からみて中里氏の裁量範囲がより広がったかと思われる「花日記」の方が、同性愛の完成度が低い → 「乙女の港」での高さは川端の主導（発意）か？

(二) 右二作の次の「美しい旅」で、花子の教育の主役となる筈の月岡先生がかつて明子の△お姉さま▽だった（その感情は再会により復活）という、ストオリイからは必然と思えない同性愛要素が添う → この作品は完全に川端本人の作だから、前二作の同要素も川端のもの？

などとも考えられるかと思うが、勿論これで決まるわけではない。

大前提としては川端が三長篇以外の少女小説でも、それより少し上の年齢向けの小説、更に通常の成人向け小説でも、或いは同性愛を主題とし、或いは主題は明らかに別なのに主題から必然とは思えない同性愛要素を書き込んだ作品を幾つも残している、そうした文学上の嗜好があったことは確かである。そしてこの傾向を作者若年時の実生活上のペダラスティ体験と結びつけて、その根深さを主張する説もあるけれども、当面の作品に関しては組んだ相手がレズビアニズムにはより近しい巾幗作家であるから、川端の好尚だけを云ってものはじまらない。

気には懸かるが早急に説得力のある結論は出そうもないし、また本

稿の問題はこのことの決着に俟つわけではない。

註1

「マサヲ」少年の父を主役とする「縦ノ木ノ話」。旧かなづかい使用で、軽井沢には「アメリカヤ、イギリスヤ、支那ヤ」いろいろな国民の家がある、とするところから見て、遅くも昭和十年代初頭以前の作であろうか。「高原」（昭12・11）に十二年夏のこととして、「軽井沢に店を持つて、商売に出張する中国人」以外の「ただ避暑に来る中国人は入らせない」とか、「入れないんぢやない、来ないんぢやう。中国人は避暑にも来てゐられないだらうからね」とある。

2 月岡先生の渡満前の段階で

「私の子供たち（聾啞学校の生徒）を捨てて、どこへもゆけないと思ひましたわ。」

花子のお母さまは、先生のきれいな横顔を、ふと見上げて、

（お嫁にも……？）

と、口のなかでつぶやいた。

というくだりがある。或いはこれは、そのモデルの女性（昭32・10刊の秋山ちえ子氏のエッセイ集『お勝手口からごめんなさい』に川端が付した「美しい旅」（小説と話題）によれば、同女がモデルという）に対する作者自身の思いでもあったのだろうか。

3

「高原」は作者自ら「初め漠然と頭にあつた意図や筋はその通りに発展しないで、軽井沢の夏の印象記風なところが勝つて来た」とする（昭15・9刊改造社版『新日本文学全集・川端康成集』あとがき）が、その軽井沢風物は「支那事変の始まつた年の夏」一夏の印象「に限つたつもり」だと云う（昭14・12刊改造社版『川端康成選集』第九巻あとがき）。「高原」の断続発表開始はその年の十一月号で「乙女の港」の当該章初出と同月だから、あながち「乙女……」からの転用とは限らず、同一矚目対象を並行作「乙女……」と「高原」との両方に用いるつもりが偶々後者では出番がなかなか来なかった、といった事情だったかも知れない。

4

長谷川泉氏に、この同性愛要素と一篇の主題との関連づけについて、

花子の美しさと、明子のまぶしいような美しさにまいてる咲子（入院中の父親の見舞に上京する花子と列車内で知り合った少女）、そして（略）月岡さんとの関係などには、同性愛の匂いがつきまとう。

川端康成が、「女学生」などで描いていた世界と同じような次元の要素が「美しい旅」にもある。それを低次元のものとして斥け去ることはできない。／これらの女性間の甘い同性愛の雰囲気は、花子への同情（略）によって、子供の世界の純粋なものに浄化されている。そして「美しい旅」を同性愛の雰囲気から、さらに高めているものは、教育者である月岡さんの花子教育のプランであり（略）

という、二つのオブセッションの間での苦渋な解説（昭53・1教育出版セクター刊『近代日本文学の側溝』「川端康成の児童文学」）がある。最終的には「浄化され」「高め」られているならいいようなものの、浄化という手数を要する要素（それは「低次元のもの」なのだ、が斥けてはいけないのか、本来「低次元」などではないのか不明確だが）をわざわざ持ち込んだ、そもそもその心因の問題性が逆に浮かび上がって来よう。

なお、川端作品の本文は原則として三十七巻本全集に拠ったが、「乙女の港」についてはさる個人的因縁から昭和二十一年初版のヒマワリ社刊本を用いた。すでに茫々たる往時に本稿執筆の杳かな機縁を与えられた同学の先輩
洗礼名 Bertha 木村智江子さんに、遅い感謝を捧げる。

（平2・9・25稿）